

石川県立看護大学 学長

真田弘美 さん

ニチバン株式会社 代表取締役社長

高津敏明 さん

皮膚を守ることが、 健康長寿な人生を支える

ニチバンといえば「セロテープ®」が有名だが、実は売上の半分以上をメディカル事業が占める医療系の企業だ。独自の粘着加工技術を軸にした医療用テープや絆創膏は、貼り心地が良く、皮膚へのダメージが少ない。ニチバンの高津敏明社長と、石川県立看護大学の真田弘美学長の接点は、褥瘡や創傷ケアに欠かせない医療用テープだ。「皮膚を守るとは健康長寿に通ずる」と語るお二人に、スキンケアの重要性について話していただいた。



看護とニチバンの出会い

真田 私は、長い間褥瘡や傷を治す研究、仕事に携わってきて常々不思議だったのは、傷に貼るテープや絆創膏は、ほとんどが外国製だったことです。輸入品にも良いものはありますが、こと褥瘡や傷に貼る医療用テープは国産で作るべきだと思っていました。その理由は、本邦は超高齢社会を迎え、

お年寄りの肌がとても薄くなり、乾燥しており、この脆弱化した皮膚には、日本人の肌を知り尽くした国産品の必要性を強く感じておりました。当時日本で医療用のテープを作っている会社は3社ありました。でも2社はほとんど生産してなくて、唯一、製造していたのがニチバンさんでした。そのときに「日本の褥瘡や創傷など皮膚を守る製品は、ニチバンさんの技術力が必要なので、ご協力いただきたい。そして日本の技術力を、同様に高齢社会を迎えている国々に発信してください」と申し上げたのです。

傷の止血や靴擦れなどの際に使う絆創膏、いわゆる「キズバン」(ニチバンが1997年(平成9年)に発売した「ケアリーヴ」は、そのキズバンの常識を変えたといわれる。貼り心地や通気性に優れ、剥がす時の皮膚へのダメージが少ない絆創膏だ。その製品に使われる独自の粘着加工技術は、病院向けの止血製品や手術用処置用のサージ

カルテープなどにも応用されている。奇しくもその医療用テープが、真田さんとニチバンを結びつけた。

高津 医療用テープは、当時はグローバル企業が日本に参入していて、種類がものすごくありまして、形、グレードなど色々あって、種類や数を含めてグローバルに展開していかないと、日本企業単独ではなかなかやって行けない時代でした。われわれも海外に打って出るには特徴を出さないとすぐに真似されて、価格や品質も安からう、悪かろう製品にとって替わられかねない。それでずっと、独自色を出すことに注力してきました。

真田 そんな時に真田先生が、東大を定年退官されるとうかがって、これはぜひ当社の社外取締役になっていただけるチャンスだと思ひまして、2022年2月2日に大学にご挨拶に伺わせていただいたのです。

高津 その席で、褥瘡や創傷ケアはどういうデータが必要で、何が良くて悪いのか、どんな治療が

効くのか、きちんとした臨床データはありますか？と担当の方にお尋ねしたと思います。これからの看護はエビデンスが大事になっていくので、臨床での皮膚の機能評価や患者満足度など、臨床データを数値化してぜひ製品開発に活かしていただきたい。そうお願いをしたのです。

高津 当時、きちんとした臨床データやエビデンスはとっていませんでした。真田先生のアドバイスを受けて、開発部員たちが皮膚の伸びと素材の縦、横の伸びをどう調整するかなど、データをとって追跡調査をするなどかなり研究したようです。様々なデータを数値化することで、先生がおっしゃるようないろんな課題の克服につながったと思います。

皮膚は生きている

高津 医療用テープで求められるのは、まず貼り心地が良く快適。通気性に優れ、清潔で、剥がす時に皮膚へのダメージが少ないことです。とくに、剥がした



時に、皮膚へのダメージが少ないことが、私どもの粘着加工技術が評価された理由だと思っています。

真田 看護の立場から言うと、まず患部に隙間なくピタッと貼れる。それでいて、剥がす際の皮膚への負担を抑え、皮膚を傷めずに見える。通気性とかあまり考慮されていない製品は、1〜2日すると皮膚がふやけて白くなつて、テープを貼り替えるときに剥がすと、一緒に皮膚がベロツとめくれてしまう。患者さんは、それですいぶん苦しんできたのです。患者さんの痛みをなんとかして解消したいというのが、現場の看護師の願いでした。

褥瘡研究で世界的に知られる真田さんが、ニチバンとの連携でこだわったのは、これまでの外国製品では実現できなかった皮膚への低刺激性と高い固定力を両立させることだった。ニチバンの「粘着加工技術」が医療現場で絶大な信頼を得たのは、剥がす時の痛みの解消、皮膚へのやさしさをクリアしたことにある。代表的な製品の1つが、帝王切開

一緒に剥がれてしまうんですね。粘着剤もただ均一に塗るだけではなく、私たちは粘着剤に細かい空気を含ませることで、水分を逃がす工夫をしています。長期間、皮膚に貼っていてもムレにくいような作り方をしています。

真田 そうなんです。要するに、テープは貼るだけではダメなんです。外国製品で、ゲル状のもので1枚数千円するものもありますが、価格が高い割に剥がれやすかったり、通気性が悪かったり。それを改善できないか外国の企業に言つたとしても、メーカーではなくディーラーなので、おそらく作ってもらえなかったと思います。もつと一般の人が自分で貼れるように粘着剤に工夫がされているとか、皮膚障害を起こさない前提でつくられていないと、褥瘡や裂傷には対応できなかったと思います。

看護ニーズと産学連携

真田 褥瘡ケアと点滴に使うフイルムのこと、今日は高津社長に改めて感謝をお伝えしたいの

生きている

皮膚は

などの手術後の傷あとをカバーする「アトファイン」だ。傷あとが目立つ原因となる摩擦やひっぱられる力、紫外線などの物理的刺激から保護する製品だ。新しい命を生み出したお母さんをはじめ、手術を受けた方の皮膚と心を守り、その後の人生を支える製品として高く評価されている。

高津 皮膚はとても繊細な組織だと思ふんです。常に新陳代謝を繰り返して、必要な潤いを保ちながら汗などを排出しています。テープといえども、人の皮膚の生理機能に合うかどうか、粘着剤も素材もじっくり検討する必要があります。あり、結局のところ通気性が重要なキーになります。まずは初期粘着でしっかりと固定する。そのうえで通気性、透湿性が担保されていないと、テープの中に汗などの水分が溜まってしまいます。水分をうまく逃がすことができないと、皮膚が白く、ふやけてしまいます。そうすると皮膚が弱くなつて、テープを剥がすときに

です。最初に褥瘡ケアについて少し経緯を説明させていただくと、2024年1月の能登半島地震で輪島市門前に残り残された二つの施設から、褥瘡の患者さんが出たと石川県から報告を受けました。大学ですぐに褥瘡対策班を立ち上げ、現地に向かう準備をしていた時に、傷の上に貼るフイルムがないことに気づいたので。褥瘡は、傷の上に透明なフイルムを貼ってきちんと固定しないといけないのでどうしようと思っていました。いろんな会社と連絡をして「明日必要なのでなんとか手配できませんか?」とお願いしたのですが、どこも「明日の朝までには間に合いません」。困り果てていた時、夜9時ごろにニチバンさんの担当の方が東京から直接、持ってきてくださったんです。あれは本当に助かりました。石川県と大学を代表して改めてお礼を申し上げたいと思います。その節は本当にありがとうございました。高津 いえいえ、こんでもういません。東京と金沢は今や新幹線で一本ですし、2時間半ほどで着き

ますから。担当には「直接、持つて行った方がいい」と伝えたんです。真田 もうひとつ感謝申し上げたいのは、私たち看護師は患者さんに点滴をするときに、点滴針を固定するフィルムを使いますが、その開発にもご協力いただいたことです。看護師にとって、末梢点滴カテーテルなど患者さんの血管に点滴針を通す行為は意外にハードルが高く、失敗する確率が約30%あり、何回も刺しなおすことがあります。そんな時に「ごめんなさい、私の血管が悪くて」と謝られる患者さんが多いんです。でも穿刺に失敗するのは患者さんのせいではなく、そもそも看護師の手法にあります。患者さんに謝らせてしまう看護師自身の不甲斐なさ、それを繰り返し返される穿刺による患者さんの痛み、それをなんとか改善したいと思ったのです。そこで考えたのが上腕から入れるミッドラインです。難易度の高い点滴になると、血管内に安全かつ確実にカテーテルを挿入するため「ガイドワイヤー（金属製の針金）」といった補助道具を使います。そのためには滅菌操作が必要

で、とても高度な技術が要求され、患者さんも感染の危険性が高まります。それを今まで通りの末梢点滴と同じような感覚手技で扱えるように、ガイドワイヤーの操作などの複雑なステップを踏まなくても良いようにしたかったのです。ちょうど、上腕内側の血管が通常の血管よりも3.3倍太く、一回で針を通せることがエビデンスで明らかになり、ガイドワイヤーを使わずにカテーテルを挿入できる「ミッドラインカテーテル」を大手企業と共同開発しました。問題は、そのミッドラインを刺すためには、エコーによる穿刺部位の選定が必要で、ガイドワイヤーのないカテーテルを通すには、エコーを通して血管がみえるフィルムが必要となりました。色々調べた結果、ニチバンさんのフィルムだけがエコーを通すことがわかったのです。それで相談に乗っていただき、医師の直接的な指示がなくても今まで通りの感覚手技で扱える点滴ができるようになりました。たぶん、一番喜んでるのは、患者さんと穿刺がストレスになっていた看護師ではないかと思います。

看護から企業のイノベーションを育てる



真に必要なものを届ける



に治療にアプローチしようと考え
ています。今までは、創傷にテープ
を貼って状態を悪くしないことに
主眼を置いていましたが、これから
は治す仕組みを研究し、その要素
を被覆材に織り込んでいく。

同様に、COPDという肺疾
患の早期発見に向け、胸部に貼っ
て呼吸や脈拍を継続モニタリング
する技術の研究を進めています。
長年培った粘着技術を強みに、デ
バイスと一体となったソリューション
を提供しており、今後はこの技術
をベースに多様なヘルスケア・医療領
域へ用途を拡大していきます。

真田 企業のイノベーションはどこ
から起きるかという点、私は消費者
ニーズ、現場からではないかと思っ
ています。現場の視点に立った発
想は、高津社長の考え方や経営理
念にもあらわれている気がします。

高津 私は設計部門が長かったこ
ともあって、当時は企業側が「こ
れがいい」と思うものを設計する
思考が強かった気がします。し
かし営業を経験してから「お客様
が、価値があると思うものをつ
くらないと買ってもらえない」と

痛感しました。お客さまが困って
いて、真に必要なものを届ける。
そういうニーズや情報をきちんと
汲み取って、設計・開発部門に伝
えてモノを作り出していく。マー
ケットインの思想を、これからも
大切にしていこうと思っています。
真田 皮膚のケアがいかに大事
か、最近改めて感じます。皮膚は
常に目に見えて、人がふれること
ができる部位です。看護している思
うのは、実際に患者さんの皮膚に
ふれることで、人のぬくもりや、人
とつながる喜びを実感できること
です。年齢を重ねた皮膚は、残念
ながら若い時の皮膚に戻ることは
ありません。でも人生100年
時代と言われる今、長寿を想定し
て皮膚を守ることは、何より病氣
の予防や治療、そして看護師と療
養者のコミュニケーションにもつな
がります。しっかりとした予防は、
健康長寿に通ずることだと思いま
す。最後まで自分らしく生きる
ために、ぜひ、日頃から皮膚のトラ
ブル予防を心がけていただきたい
ですね。本日はお忙しいところあ
りがとうございました。

Profile



真田 弘美

(さなだ・ひろみ)

石川県立看護大学・学長／
東京大学名誉教授

医学博士。1979年、聖路加看護大学卒。米国イリノイ大学
看護学部大学院修了。聖路加病院、金沢大学医学部附
属病院で臨床を経験後、金沢大学医学部保健学科教授、
2004年に東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護
学専攻老年看護学分野の教授に就任。東京大学大学院
医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンター
長を最後に定年。18年間勤務後、2022年から現職。



高津 敏明

(たかつ・としあき)

ニチバン株式会社
代表取締役社長

1966年兵庫県生まれ。関西大学工学部卒
業後、ニチバン入社。入社以来20年間、設
計・品質管理に携わり、マスキングテープの
設計などを担当。2015年事業統括本部購
買部長、2018年執行役員メディカル特販営
業部長を経て、2019年より現職。

看護からイノベーション

テープを剥がす時の「痛みが
ない」や「むれない」「かぶれな
い」「扱いやすい」といった真田
さんたち看護の声は、ニチバン
に新たな産学連携や製品開発
をもたらしている。高津社長は
「看護から企業のイノベーショ
ンを育てる状況が生まれてい
る」と分析する。

高津 現場の声を聞く、エビデ
ンスを取ることの重要性は、医療用
だけではなく、製品全てに通ずる
ことだと思っています。今年は、当
社の中期経営計画「CREATI
ON2026」の最終年です
が、一つはグローバル展開として海
外の売上構成比率を高めること、
もう一つは医療領域で一般向けの
製品をもっと増やすことに取り組
んでいます。その一環として、東京
大学との間で「次世代創傷ケアの
開発」をめざす社会連携講座を
開設し、本格的な産学連携を進
めています。高齢化などで増加す
る「難治性創傷」に対し、能動的

簡単本格テーピング!

誰でも
簡単固定

蒸れにくい

目立たない
ベージュ



曲げると痛い**指**に
バトルウィン™
指プロテクター
関節サポートテープ(非伸縮素材)



曲げると痛い**親指**に
バトルウィン™
指プロテクター
腱鞘サポートテープ 親指用



曲げると痛い**手首**に
バトルウィン™
手首プロテクター
手首サポートテープ(ベージュ)



疲れる**足裏**に
バトルウィン™
足裏プロテクター
アーチ用サポートテープ(ベージュ)



つらい**外反母趾**に
バトルウィン™
外反母趾プロテクター
足ゆびサポートテープ(ベージュ)



バトルウィン™ プロテクターシリーズ
製品情報はこちら▶



TM: trademark

企業情報



ニチバン株式会社

所在地 : 東京都千代田区麹町5丁目1番地
設立 : 1918年(大正7年)
代表者 : 代表取締役社長 高津 敏明
売上高 : 504億70百万円(連結、2026年3月期)
従業員数 : 1,271名(連結、2026年3月現在)

▼ 主なあゆみ

1918年(大正7年)1月、東京南品川に、創業者の歌橋憲一が「歌橋製薬所」として創業、絆創膏類、軟膏・硬膏類の製造を開始。大正期は、軟膏や貼り薬を製造する一方、独自の硬膏技術を応用し、ゴム絆創膏を開発、独自の機械で大量生産し、病院などへ販路を拡大した。

1944年(昭和19年)、戦時下の材料不足に対応するため、国内の絆創膏メーカー25社が、企業整備により一つに統合された。「日本を代表する絆創膏会社になる」という強い願いを込めて、商号を日絆工業株式会社とする。1961年(昭和36年)にカカカナの「ニチバン株式会社」へ社名変更した。

1947年(昭和22年)、日本に駐留していたGHQから「検閲した手紙の封緘に使うセロハン粘着テープを作って欲しい」と打診される。アメリカからの輸入が遅れて品不足になっていた。絆創膏の製造技術を応用し、わずか1ヶ月で試作品を完成させたことにGHQが驚き、1948年(昭和23年)6月、「セロテープ®」として一般市場に販売を開始した。

1968年(昭和43年)、東京・大阪 両証券取引所に一部上場

1978年(昭和53年)、野菜結束機「たばねら」および野菜結束テープ「たばねらテープ」を発売、1997年(平成9年)、救急絆創膏「ケアリーヴ」発売、ともに大ヒット。

2005年(平成17年)、メディカル製品開発センター開設
2016年(平成28年)、外科手術後傷あと専用ケアテープ「アトファイン」発売
2017年(平成29年)、タイ・バンコクにNICHIBAN(THAILAND)CO.,LTD.設立
2018年(平成30年)、創業100周年
2020年(令和2年)、ドイツ・デュッセルドルフに販売小会社設立
2024年(令和6年)、中国・上海に駐在員事務所設立



「ケアリーヴ」、「アトファイン」、「たばねら」は商標です。「セロテープ」は登録商標です。

製品

ケアリーヴ™



アトファイン™



たばねら™



セロテープ®

